

がん研究奨励賞 (林原・山田賞)



榮 浩行

略 歴

平成20年3月 福岡大学医学部医学科 卒業
平成26年4月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科博士課程 入学
平成30年9月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科博士課程 修了見込み
平成21年4月 福山市民病院 初期研修医
平成23年4月 福山市民病院 内科 後期研修医
平成24年7月 三豊総合病院 内科 後期研修医
平成26年4月 岡山大学病院 消化器内科 医員

研究論文内容要旨

原発性小腸癌は、全消化管腫瘍の1～2%と稀な疾患で、多くは進行期に発見され予後不良で、その臨床的特徴はいまだ十分に明らかになっていない。我々は、原発性小腸癌の臨床的特徴を明らかにするため、2002年6月から2013年8月の間に、当院及び関連施設（計11施設）で原発性小腸癌と診断された205例を対象として、その臨床的特徴、治療成績について後方視的に検討した。

検討の結果、空回腸癌の多くが症状出現後に進行期で発見されていた一方で、十二指腸癌はスクリーニング目的の上部消化管内視鏡（EGD）で発見されることが少なくなかった。また、全生存期間に対する独立した予後不良因子として、PS不良（3-4）、CEA高値、LDH高値、Alb低値、診断時症状、Stage III-IVが抽出された。Stage IV患者54例のうち、原発巣切除、化学療法、遠隔転移に対する局所治療の全てが行われた集学的治療群が10例（18.5%）で、化学療法単独群、BSC群と比べ、生存期間は有意に長かった（集学的治療群36.9か月、化学療法群12.3か月、BSC群5.9か月）。

本研究の結果から、検査理由に関わらず、EGDを施行する際には、十二指腸腫瘍の発見も念頭におき、十二指腸も注意深く観察することが望ましいと考えられた。また、進行小腸癌の予後は不良であったが、遠隔転移に対する局所治療も含めた集学的治療が、進行小腸癌の予後を延長する可能性が示唆された。